

青少年の友人関係の使い分け志向と学校生活

—— 日韓中高生を対象とした意識調査をもとに ——

小澤 昌之

論文要旨

東京都とソウルに住む中学・高校生に対する質問紙調査をもとに、友人との付き合い方やコミュニケーションの相違点を把握した上で、友人関係の使い分け志向を促す要因を検討する。分析結果によれば、第1に基本的に日韓の中高生は共通して友人関係作りを回避しているわけではないが、友人との関係は一定の距離を保ちあまりお互いに深入りしない。ただし友人関係の選択化に関わる項目に関しては、日本は友人との話題、韓国は友人付き合いを使い分ける対象に違いがある。第2に友人関係の使い分け志向を肯定する規定要因に関しては、日韓両国とも on-line 上の友人関係がある場合は、日常接する友人とは異なる話題や接触方法でコミュニケーションをとる傾向にある。日本の中高生は、学校に適応しており、学習時間や携帯電話の操作時間が長いほど友人関係の使い分けをしやすい。韓国の中高生は、出身階層が高いほど、友人の使い分けをしやすい傾向が現れた。

キーワード【友人関係の選択化、社会経済的地位、社会化エージェント、on-line ネットワーク、日韓比較研究】

1 問題の設定

現代社会の青少年を取り巻く環境は、個性の重視や価値観の多様化、携帯電話やインターネットなどのパーソナル・メディアの発達、さらに世界規模のテロの多発を端緒とする市場経済の不安定化など、様々な事象が相互に絡み合い複雑化の様相を呈している。

日本においては、受験競争の緩和や、1990年代以降の学校の個性化教育の潮流の中で、「居心地の良い学校」を目指す「学校のコンサマトリー化」（伊藤 2002）の影響を受けてきた。生徒は学業を重視する意識が相対的に低いものの、学校の内と外の境界が曖昧にする分、学校に適応してきた（藤田・熊谷 2002）。一方社会経済的インフラや教育水準が日本と近似する韓国では、1990年代後半に発生した通貨危機の影響で大卒就職率が急速に低下し、大学進学に力を入れる一般系高校（日本の普通科高校に相当）ほど、補習授業の増加がみられ、保護者による学校や授業内容への関与が強まった（中村・藤田・有田編 2002）。その頃から韓国の中高生にとっては、学校を学業に特化した場所として割り切り、学校外では流行や遊びなどを重視するという切り替え志向が強まったとされる（藤田・熊谷 2002）。

青少年の友人関係に注目すると、インターネットなどのパーソナル・メディアの普及に伴い、友人関係のあり方も質・量ともに変容した（辻 2003; 福重 2006）。浅野（2008）は「世界青年意識調査」（内閣府）における生活の充実度を尋ねる項目の経年変化から、日本の若者の友人関係は、友人との充実感が親密な関係性を左右するとして友人関係の濃密化を指摘する¹⁾。土井（2008）も近年の日本の若者の友人関係を「優しい関係」と形容した上で、相手から反感を買わないよう「高度で繊細な気配りを伴った人間関係」が求められることを指摘している。また韓国では、「世界青年意識調査」（内閣府）の生活充実度項目において、友人とともに「熱心さ」が上位に挙がっていたように、友人との付き合いでもカラオケやゲームなど、電子機器の操作を介して親密なコミュニケーションをとる割合が日本より多い（伊藤 2004）。友人数では日本より韓国のほうが多いものの、人間関係が教室内に閉ざされる上、お互いに一定の距離を置く傾向があるとされている（馬居他 2005）。

そこで本稿は、東京都とソウル特別市に住む中学・高校生に対する質問紙調査の個票データを用いて、日本と韓国における青少年の友人との付き合い方やコミュニケーションの相違点を把握した上で、友人関係の使い分け志向を促す規定要因を検討する。

2 先行研究

2.1 日本の青少年をめぐる友人関係の先行研究

本節では、日本と韓国の青少年における友人関係の変容に関する先行研究を整理した上で、本稿における調査分析に向けた課題を提示する。具体的には日本と韓国における友人関係の態様や相違点、パーソナル・メディアの発達によるコミュニケーション・チャネルの多様化が、中高生の友人関係に及ぼす影響に関して先行研究をもとに検討する。

最初に日本の中高生をめぐる友人関係については、社会心理学者を中心に議論された友人関係の希薄化論と、その批判として登場し社会学者を中心に議論された友人関係の選択化論が挙げられる。友人関係の希薄化論とは、携帯電話などの新たなパーソナル・メディアの普及やマスメディアの発達に伴い、若者が既存の組織・集団に十分に適應できない状況から、深い友人関係を忌避し、「浅く広い」関係を志向しているとする見方である（松田 2001; 福重 2006）。一方友人関係の選択化論とは、若者はいずれかの集団・組織の中で「唯一の深い」友人関係を形成するのではなく、むしろ状況や目的に応じて、複数の親しい友人関係を使い分ける傾向が現れているとするものである（松田 2001; 福重 2006; 竹内 2009）。希薄化論は「友人関係からの撤退」や友人との心理的距離の遠さを問題としたのに対し（松井 1990）、選択化論は対人関係の部分化（＝フリッパー志向²⁾）（辻 1999）や「遠い—浅い」といった関係図式のあり方（＝「多元的自己」³⁾）（浅野 1999）に焦点が当てられてきた。

その後社会学的アプローチにより、社会的スキルや親密度の側面で友人関係の希薄化を反

証する結果が得られ、2000年代以降は社会学を中心に選択化論の研究が進んだ（辻 2006）。高校生の友人関係と学校生活に関連する調査研究では、身体的接触よりも感情の共有を重視し、微細な距離感を必要とする難しい人間関係の構築が迫られているとする土井（2003）や、選択的な関係性が一般的で、全体的には友人との関係に満足しており、友人の少ない高校生ほど満足度が低く「消極的な撤退」を行うとする竹内（2009）などの研究がある。ネットワーク関連の調査研究では、辻（2004）は高校生調査の結果、他者や友人との関係の切り替えを志向する多元型の高校生は、友人との電子的コミュニケーションに親和的であるものの、親との信頼感が高く携帯電話で関係を疎隔する傾向は弱いと指摘した。また辻（2006）は、友人関係の使い分け志向を持った若者は、主観的意味の多様性や社会的スキルの学習に関する項目が、友人関係の使い分け志向を持たない若者に比べて高い一方、なるべく似通った友人を選択したいとする同質性に言及する。

したがって日本の中高生の友人関係は、パーソナル・メディアの普及や「学校のコンサマトリー化」の潮流の中で、全体的には友人との関係に満足しているものの、微細な距離感を必要とする難しい人間関係が重視される傾向にあると考えられる。

2.2 韓国の青少年をめぐる友人関係の先行研究

韓国の中高生における友人関係をめぐる先行研究に関しては、日本における日韓比較調査を中心に研究が蓄積しており、学校生活における友人との接触頻度を起点とする研究が蓄積されてきた。

伊藤（2004）は、日本と韓国の青少年でメールを頻繁に利用する者ほど、学校の意義について多くの面で肯定する割合が多く、プライベートで親密な人間関係と親和性の高いメール利用が学校への心理的距離の増加につながらないと示唆した。また、馬居他（2005）は中高生の友人関係について以下のように指摘した。第1に、友人数では日本より韓国のほうが多いものの、選択される友人はともに同じクラスが多く、日本と同様に人間関係が教室に閉ざされる傾向にあること。第2に、親友との関係については、会話内容は学校・遊びが多く、一緒に行動し勉強や悩みの相談をするものの、物の貸し借りをしないなど親密性の高い行動をとらないことから、友人との関係に一定の距離を置く傾向を指摘した。藤田・熊谷（2002）によれば、学校生活と友人との接触に関して、日本より学校外での友人との行動（例：友人と長電話をする）の肯定率が高いという。その上、最先端の流行やユースカルチャーに対する接触頻度も多いため、学校内と学校外の役割関係を明確に区別し、生活の楽しみを学校外のカルチャーで充足させる切り替え志向が強いとされる⁴⁾。

したがって、韓国の中高生の友人関係は、パーソナル・メディアやインターネットの加速度的な普及や受験競争の過熱化に伴い、友人と接触する機会は学校生活が中心となると思われる。ただ、メールでの連絡を緊密に取りながらも、互いに一定の距離を置く傾向にあるこ

とから、友人関係の使い分けが韓国の中高生にも広がる可能性があるかと推測される。

3 研究課題

本研究では、日本と韓国の中学・高校生を対象として、使い分けられている友人関係の動向やその背景について分析する。具体的には、日韓中高生の友人付き合いやコミュニケーションの相違点を把握した上で、友人関係の使い分け志向を促す規定要因を検討する。

第1の研究課題は、付き合う友人の数や相談相手のように、両国の友人関係の相違点に関して、友人の質と量の側面から検討することである。先行研究の知見によれば、日本と韓国の中高生は学校およびその周辺に親しい友人が多いうえに、相手と一定の距離を置き友人関係を使い分ける傾向は共通するものの、日常生活における生活時間の比重を多く占める学校生活の態様と、そこでの友人関係の付き合い方は日韓で違った傾向が判明した。

日本の学校は、「学校のコンサマトリー化」や受験競争の緩和に伴い、「不満もあるがほりあいもある場所」から「不満もないしほりあいのない場所」へと変貌を遂げ、生活世界に占める学校の役割が低下したとされる(大多和 2000)。故に教師は個性化教育の浸透を受け、生徒の主体的選択を重視するため、生徒一人ひとりの自己実現に向けて、生徒の選択を助ける支援者としての位置づけが強まったとされる(大多和 2008)。

日本の青少年における友人関係の研究は、女子生徒ほど学校を相談相手の友人がいる場所として見るものの、男子生徒は必ずしも学校を活用する場所や充実感のある場所として見ておらず、結果的に生徒の人間関係から見た「集団としての学校の比重の低下」が指摘されている(工藤 2010)。また友人の数に関しては、友人の数が少ない高校生のほうが友人関係に希薄化の傾向がみられるものの、友人の数が多くなるほど友人関係は「あっさり」していない(竹内 2009)。そして友人と過ごす時間に関しては、友人と一緒に過ごす時間が長いほど、自己開示する量が多くなることから、他者に対し一定の距離を置く志向を持つ人は友人関係に時間を費やしたがらない傾向にあるとされる(尾上 2007)。

韓国の学校では、高校入試における「平準化」⁵⁾政策の弊害を解消すべく、政府が1980年代半ばより科学高校などの特性化高校(専門高校)を創設してから、学校側は次第に授業内容の受験シフトを強めたとされる(石川 2005)。その後1990年代後半の通貨危機と高等教育拡大政策による大卒者の急増に伴い、大学の難易度や都市-地方の大学間格差によって就職の機会が左右されている状況(金 1998)と相俟って、韓国の学校は中学から高校へと上がるにつれて、大学入試に向け学業に特化した体制へと変貌したという。

韓国の青少年における友人関係の研究では、多くの中高生が学校を「友達と話す・遊ぶところ」と回答する一方、学校が学業に統制されているため、「生活のエンジョイ」は学校外の文化接触により充足する傾向にある(藤田・熊谷 2002)。親しい友人との会話内容は学校・

遊びが多く、友人との関係に一定の距離を置くようになるとされている（馬居他 2005）。また友人の数に関しては、韓国のほうが日本より多いものの、選択される友人は塾や習い事、近所の幼馴染など友人の幅の広さに意義があるとされる（馬居他 2005）。そして友人と過ごす時間に関しては、韓国の若者は他国の若者に比べ、親しい友人とは住んでいる場所に関係なく接触時間が長くなる傾向が指摘されている（清水 1997）。

第1の研究課題では、日韓中高生における友人数や友人と過ごす場所など友人関係の「質と量」に焦点を当てて比較を行い、中高生における友人関係の実情を検討する。先行研究を踏まえると、日本の生徒は友人の数が増えるほど使い分け志向が高まるものの、友人と過ごす時間は一定の距離を保つ観点からそれほど長くはないと予想される。韓国の生徒の場合は友人の数が増えるほど使い分け志向が高まることは共通しているものの、全体的に日本よりも友人の数が多く、友人との接触時間が長いことが予想される。

第2の研究課題は、日韓青少年における友人関係の使い分け志向を促す規定要因である。日韓中高生の教育をめぐる先行研究に関しては、例えば有田（2002）は、日本は親の職業がホワイトカラーで父学歴が高いほど教育アスピレーションが高まるものの、韓国では教育アスピレーションに階層差が存在しないため、出身階層による媒介効果は限定的だと指摘した。次に友人関係と学校・家族・社会など社会化のエージェントとの関連性に関しては、韓国の中高生は、親や教師といった社会化のエージェントは学力試験を主体とした選抜システムへの対応に動員され、青少年は学校段階の上昇に従い友人関係も統制的となる状況に葛藤を抱く傾向にある（有田 2006; 金 2007）。日本の中高生は、「家族・親族」が相談ネットワークに含まれる場合は、親族に相談する生徒ほど教師や友人との関係も良好で、高校生活に適応的であるものの、あまり話さない同級生など、関係の弱い他人に相談する生徒ほど高校生活に適応的な意識を有さない傾向がある（工藤 2001）。

藤田・熊谷（2002）は、中高生の学校への適応には日韓共通して学業成績が影響を及ぼすものの、学業成績の相対的な影響力は韓国の方が大きく、学業成績は出身階層と独立して影響を及ぼしたとするように、社会階層と教育アスピレーション・学校適応の関係を分析する研究が多い。また友人関係の使い分け志向を規定する要因については、若者による消費空間やサブカルチャーへのコミットの増大、携帯電話やインターネットの普及（辻 1999; 浅野 1999; 松田 2000; 辻 2003）、学校での友人関係満足度（竹内 2009）などが挙げられる。

そこで第2の研究課題では、青少年の友人関係の使い分け志向を促す要因に関して、日韓青少年の教育比較研究で指摘される社会化関係要因や社会階層要因による影響を分析する。先行研究の結果を踏まえると、友人関係の使い分け志向に関しては、日本の場合は社会階層要因との関連性があまりみられないが、学校生活の適応や家庭生活など社会化関係要因との関連性が認められることが予測される。韓国の場合は、日本より友人付き合いに学業の側面が重視されることから（藤田・熊谷 2002）、社会階層要因や教育達成要因だけでなく、親や

教師といった社会化関係要因との関連性が認められることが予想される。

4 調査の概要

使用するデータは2009年11月から2010年3月にかけて、慶應義塾大学グローバルCOE「市民社会におけるガバナンスの教育研究拠点」(GCOE-CGCS)と慶應義塾大学YES研究会、韓国青少年政策研究院(NYPI)が日本と韓国で実施した「第2回青少年の生活についての調査」(研究代表者:慶應義塾大学文学部教授(当時)渡辺秀樹)である。

日本では住民基本台帳をもとに無作為に抽出した東京都に住む中学2年～高校2年生の生徒(有効回答数711人)を対象に実施した。具体的には、住民基本台帳からサンプルを無作為抽出した上で、都内の市区町村の人口規模を基準にして3層(23区と大都市、中小都市・町村)に分け、人口規模に応じて、各層における調査地点数を割り振った。

韓国における調査は、ソウル特別市行政区の無作為に抽出した中学2年～高校2年生の生徒(有効回答数771人)を対象に実施したものである。具体的には、韓国統計局の人口統計(2008年12月31日現在)に基づいて、行政区の人口規模に比例した割当を算出した後に、行政区および性別・学年による割当を設定し、行政区内の調査地点を無作為に抽出した。調査に関しては日韓共通して訪問留置法で行われ、地点ごとにサンプルを選定し、対象者の自宅に赴き質問紙を配付・回収する方式が取られた⁶⁾。

5 調査結果

5.1 日韓青少年の友人関係における希薄化／選択化の比較

ここからは、本調査で得られたデータをもとに、日韓中高生の友人関係の現状について概観したい。まず本節では、友人関係の希薄化／選択化の状況について把握する。

表1は、友人関係の希薄化／選択化に関する項目について、日本と韓国の男子・女子中高生別に χ^2 検定を行ったものである。友人関係の希薄化について調べた「友人作り重視」(a-反転項目)は日韓の男女とも肯定の割合が6～7割と多く、「友人との距離維持」(b)についても、肯定の割合が日韓の男女とも過半数を超えている。全体的には、日本と韓国の中高生は、共通して量的な意味での希薄化(友人の数)は起こっておらず、日本より韓国の方が友人と多く付き合う傾向が見られた。ただ、質的な意味での希薄化を指す「友人との距離維持」が過半数前後となっていることから、日本と韓国の生徒は友人との親密なコミュニケーションを避け、一定の距離を保つ傾向にあると考えられる。

次に友人関係の選択化を調べた「話題使い分け」(d)は日韓共通して約7割が肯定の回答をしたのに対し、「遊びでの友人使い分け」(c)については、肯定の割合が日本では4割

表1 友人との付き合い方（希薄化／選択化項目）（ χ^2 検定）

			まったく そうでは ない	どちらかと いえばそう ではない	どちらかと いえばそう である	まったく そうである	検定	
友人関係希薄化項目	a. 友人をたくさん作るように心がけている(反転) (友人作り重視)	男子	日本	30.7	31.8	27.8	9.6	***
			韓国	19.6	49.3	24.8	6.4	
		女子	日本	25.5	34.8	26.4	13.2	***
			韓国	17.4	52.6	23.7	6.3	
	b. 友人との関係はあっさりして、お互い深入りしない(友人との距離維持)	男子	日本	16.0	43.6	30.5	9.9	***
			韓国	7.9	33.3	47.9	10.9	
		女子	日本	12.0	42.6	35.7	9.6	***
			韓国	6.3	33.2	49.6	11.0	
友人関係選択化項目	c. 遊ぶ内容によって、一緒に遊ぶ友人を使い分けしている(遊びでの友人使い分け)	男子	日本	18.4	23.0	40.9	17.6	***
			韓国	8.7	27.8	44.7	18.9	
		女子	日本	21.0	27.2	37.1	14.7	***
			韓国	9.0	29.6	47.7	13.7	
	d. 色々な友人のつきあいがあり、それぞれ話の内容は違う(話題使い分け)	男子	日本	7.0	18.3	45.4	29.3	***
			韓国	4.0	27.2	52.8	16.0	
		女子	日本	3.6	18.6	49.2	28.5	***
			韓国	4.4	23.8	59.7	12.1	

註) 単位は%。検定については以下のとおり。*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$ 。

に留まるものの、韓国では約6割に達しており、日韓の中高生の間に回答傾向が分かれた。友人関係の選択化に関わる日韓中高生の相違点を整理すると、日本の中高生は話題の使い分けを重視するのに対し、韓国の中高生は友人の使い分けを重視すること、そして友人関係の使い分け傾向は、男子よりも女子に特に顕著に現れる傾向にあることが判明した。

これまでの分析結果を俯瞰すると、次の通りである。第1に基本的に日韓の中高生は共通して友人関係作りを回避しているわけではないが、友人との関係は一定の距離を保ちあまりお互いに深入りしない。第2に日韓の中高生とも、一般的に友人関係の使い分けを重視する傾向にあるものの、日本は友人との話題、韓国は友人付き合いというように、友人を使い分ける対象に違いがある上に、この傾向は日韓共通して男子より女子に顕著に現れた。次節では、友人との付き合いの内容をもとに具体的な特徴や相違点について描写する。

5.2 日韓青少年の友人付き合いとコミュニケーションの関連性

次に日韓中高生の友人関係の具体的な特徴や相違点について、「質と量」の側面から整理する。本節で注目するのは友人関係の使い分け志向に見られるコミュニケーションの特徴で

あり、具体的には相談相手の影響や友人の量、親しい友人と接する時間に焦点を当てる。

表2は日常生活で相談できる相手として挙げた人（複数回答式）と、友人関係の選択化に関係する項目の間に2要因の多変量分散分析（MANOVA）を行ったものである。なお分析に当たっては、友人関係の使い分けの程度を量的に把握しやすくするために、友人関係の選択化に関係する項目を尺度構成した「選択化得点」を従属変数として投入した⁷⁾。独立変数（固有因子）としては、相談できる相手として回答した人のうち、社会化エージェントに関係する間柄（両親、きょうだい、学校の教師・友人、趣味の仲間）を抽出し、日本と韓国の中高生との間で比較を行った。

表2の分散分析の結果に注目すると、相談相手に「学校の友達」「学校の教師」を選択した人に有意差が見られ、いずれも学校の友達・教師に相談しているほど、そして日本より韓国のほうが友人関係の使い分けを重視している傾向が見られた。表2で注目すべきなのは相談相手の違いによって友人の使い分け志向に違いが現れたことである。

表2の結果を詳細に検討すると、有意傾向のみられたきょうだいと学校の教師の場合は、「相談なし」より「相談あり」の方が日本・韓国ともに、選択化得点の平均値が低下するか、もしくは平均値の増減があまり変化しなかった。一方、学校の友達の場合は「相談なし」より「相談あり」になるほど、日本・韓国ともに選択化得点の平均値が上昇した。この結果は、友人のように日常生活で接触する頻度が高い人ほど、関係や話題の使い分けが求められることを示したといえる。ただきょうだいや教師のように、生活時間に占める比重が低く、親しいコミットメントが必要とされる間柄には話題の使い分けを必要としないことが考えられる。日本より韓国の方が、選択化得点の平均値が軒並み高かった要因としては、韓国の中高生は友人との関係に一定の距離を置く傾向（馬居他 2005）が関係していると見られる。

表2 友人関係の選択化と相談ネットワークの関連性（二要因の多変量分散分析）

		日本	韓国	検定 (F 値)
両親	相談なし	5.29	5.34	2.334
	相談あり	5.30	5.59	
きょうだい	相談なし	5.51	5.46	3.436+
	相談あり	5.07	5.48	
学校の友達	相談なし	4.88	5.30	9.252**
	相談あり	5.60	5.62	
学校の教師	相談なし	5.48	5.58	6.697*
	相談あり	5.04	5.33	
趣味の仲間	相談なし	5.27	5.42	.569
	相談あり	5.31	5.54	

註) 検定については以下のとおり。*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05, + p < 0.1。

表3 友人関係の選択化と友人の数／友人と過ごす時間の関連性（相関分析）

		日本	韓国
友人の数	男子	.160**	.136**
	女子	.188**	.089
友人と過ごす時間	男子	.093	.016
	女子	.046	.040

註) ①「友人の数」は親しい友人の人数について尋ねたもの、「友人と過ごす時間」とは一番親しい友人と過ごす時間について「1時間未満」～「4時間以上」の5段階で尋ねたものである。②検定については以下のとおり。*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$ 。

表3は、友人関係の使い分けに関係する選択化得点と、友人の数と友人と過ごす時間との間で相関分析を行ったものである。なお相関分析に当たっては、表2と同様、日本と韓国の国別と男子・女子の性別に分けて分析にかけた。表3の結果によれば、選択化得点と友人との比較では、韓国・女子を除いて有意差が見られたものの、選択化得点と友人と過ごす時間との比較では、日本・韓国ともに有意差が見られなかった。友人の使い分けを重視する生徒ほど友人の数は多い傾向にあるが、友人関係の使い分けと過ごす時間との間に関連性は見られなかった。したがって、友人の数と友人関係の使い分けの関連性については先行研究における知見と一致したものの（竹内 2009; 馬居他 2005）、友人と過ごす時間と友人関係の使い分けとの関連性に関しては、韓国の若者は親しい友人と接触時間が長くなる傾向（清水 1997）とする知見とは異なる結果となった。その背景には、インターネットや携帯電話などのようなパーソナル・メディアの普及により、先行研究に比べて友人に対する付き合い方がある程度変化したことも影響していると考えられる。

5.3 友人関係の使い分け志向を規定する要因

本節では、前節までの日韓青少年における友人関係の相違点を受けて、日韓青少年における友人関係の使い分け志向を促す規定要因を検討する。具体的には、前節より友人関係の使い分けを測定する項目として用いてきた選択化得点を従属変数として設定し、友人関係の使い分けに及ぼす影響に関して重回帰分析をもとに検討する。

分析の設計にあたっては、最初に従属変数には選択化得点を用いた。独立変数には第2の研究課題における議論を踏まえ、本人の属性（「性別（ダミー変数：女子=1）」「学習時間」「教育アスピレーション」⁸⁾「携帯電話操作時間」「on-line 友人（ダミー変数：あり=1）」、社会階層要因（「親学歴（ダミー変数：大卒以上=1）」「親職業（ダミー変数：ホワイトカラー職上=1）」「学習塾通学（ダミー変数：あり=1）」）を投入した。その上で、社会化関係要因（「学校生活（授業適応、学校適応、教師関係）」「家庭生活（父親、母親関係）」⁹⁾）を投入した。投入した変数の基本統計量および変数の詳細については表4の通りである。

表 4 記述統計量

		日本		韓国		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
選択化得点		5.52	1.380	5.50	1.245	—
学校の本人属性	女性ダミー	0.47	.500	0.47	.500	女子 = 1、男子 = 0
	学習時間	86.81	89.667	210.49	154.141	1 日当たりの学習時間 (平日)
	教育アスピレーション	15.51	1.436	16.12	1.430	進学を希望する学校教育段階 (例: 大学 = 16 年)
	携帯電話操作時間	76.98	125.179	131.92	217.466	1 日当たりの携帯電話を操作する時間
	on-line 友人ダミー	0.21	.408	0.34	.476	インターネット上の友人の有無 (あり = 1、なし = 0)
社会階層要因	父教育年数	14.72	2.179	14.41	2.597	父親の最終学歴 (例: 大学 = 16 年)
	母教育年数	13.97	1.930	13.68	2.427	母親の最終学歴 (例: 大学 = 16 年)
	父ホワイトカラー上	0.08	.267	0.08	.264	父親の現職: 専門・管理職に就く = 1
	母ホワイトカラー上	0.01	.112	0.01	.080	母親の現職: 専門・管理職に就く = 1
	学習塾通学ダミー	0.40	.490	0.51	.500	学習塾に通学している生徒 = 1
社会化関係要因	授業適応尺度	13.64	3.311	15.00	3.467	学校の授業に関する項目
	学校適応尺度	18.39	3.252	15.87	3.520	学校生活の適応に関する項目
	教師関係尺度	26.30	7.264	25.60	7.050	教師に対する意識を尋ねた項目
	父親関係尺度	24.66	5.332	25.23	5.769	父親との関係を尋ねた項目
	母親関係尺度	27.48	5.932	28.88	5.203	母親との関係を尋ねた項目

分析モデルに関しては、まず友人関係の使い分け志向と社会階層や本人の属性に基づく規定力を測定するため、モデル 1 では本人の属性と社会階層要因 (学習塾通学を除く) を投入した。次にモデル 1 に加え、モデル 2 では中高生の生活時間に占める相対的な比重が大きいと考えられる学校生活に関する項目 (授業・学校適応尺度と学習塾通学ダミー) を投入し、モデル 3 では社会化関係項目の残りの項目をすべて投入した。

実際に友人関係の使い分け志向を規定する要因に関して重回帰分析にかけた結果が表 5 である。分析結果によれば、日本と韓国で共通して「on-line 上の友人」に正の効果がみられたことから、on-line 上に友人がいるほど友人の使い分けを重視することが判明した。

日本と韓国の分析モデルの比較を行うと、日本においては、親の出身階層を統制した上では、いずれも限定的ながらも、「学習時間」(モデル 1 のみ)「携帯電話操作時間」(モデル 2 のみ)、さらにモデル 2・3 に共通して「学校適応尺度」に正の効果が認められた。ただし先行研究において指摘されてきた社会階層要因については、いずれの変数も有意な影響は認められなかった。次に韓国においては、親の出身階層を統制した上では、「父教育年数」(モデル 1 のみ)「母ホワイトカラー上」に正の効果が認められたものの、社会化関係要因・本人の属性 (on-line 上の友人を除く) はいずれも直接的な影響は見られなかった。

この選択化得点に関する分析結果をまとめると、まず日韓両国ともチャットや SNS などインターネット上に友人のいる中高生は、日常接する友人とは異なる話題や接触方法でコ

表5 友人の使い分け志向を規定する要因（重回帰分析）

		日本			韓国		
		Model1	Model2	Model3	Model1	Model2	Model3
学校の本人属性	女性ダミー	-.057	-.065	-.072	-.029	-.029	-.030
	学習時間	.089*	.070	.063	-.004	-.011	-.014
	教育アスピレーション	.042	.039	.046	-.035	-.041	-.054
	携帯電話操作時間	.074+	.092*	.080+	.010	.009	.019
	on-line 友人ダミー	.091*	.091*	.086*	.162***	.165***	.156***
社会階層要因	父教育年数	.049	.052	.065	.116*	.109+	.108+
	母教育年数	.024	.040	.026	-.028	-.025	-.046
	父ホワイトカラー上	.044	.044	.040	-.014	-.017	-.029
	母ホワイトカラー上	.024	.028	.041	.089*	.090*	.084*
	学習塾通学ダミー		.068	.052		.029	.025
社会化関係要因	授業適応尺度		-.080+	-.097+		.000	-.062
	学校適応尺度		.118*	.115*		.031	.014
	教師関係尺度			.084+			.092+
	父親関係尺度			-.120+			.043
	母親関係尺度			.096			.075
F value		2.512**	2.784**	2.361**	3.201**	2.544**	2.685**
R square (adj.)		.022	.035	.036	.030	.029	.039

註) ①数値はβを示す。②検定については以下のとおり。***p < 0.001、**p < 0.01、*p < 0.05、+p < 0.1。

コミュニケーションをとる傾向にある。また日本の中高生は、学校に適応しており、学習時間や携帯電話の操作時間が長いほど友人関係の使い分けをしやすい、という結果がみられた。韓国の中高生は、出身階層が高いほど、友人の使い分けをしやすい傾向が現れたものの、本人にとって身近な社会化関係要因や本人の属性（on-line 上の友人を除く）はいずれも直接的な影響はみられなかった。

日本と韓国で共通して、on-line 上の友人関係ダミーに有意な影響を示していたことは、携帯電話やインターネットのように、直接的なコミュニケーションを避けるという観点から、「浅く広い」関係を志向する友人関係の選択化論における先行研究の知見と一致した（辻 1999; 浅野 1999; 松田 2000）。各国別の特徴について検討すると、日本の場合は、一部の変数において、モデルの変化によって変数の効果が消失するものもあるが、学習時間や携帯電話の操作時間の長さ、学校生活の適応度に正の効果が現れた。このことから、日本の生徒の場合は、友人関係の使い分けが、「テストでいい点をどうとるか」「うまく勉強するにはどうすればいいか」といった学業的要素によって促されている可能性が示唆される。また、韓国の場合は日本と同様、一部の変数において、モデルの変化によって変数の効果が消失するものもあるが、出身階層変数に有意な影響が現れた。その背景には韓国の生徒の場合には、学校の友人や塾の仲間などはほぼ同じ場合が多い上（馬居他 2005）、友人関係作りも成績や

出身家庭の影響を受けている(金 2007; 金 1998)ことから、友人を選ぶ段階で話題や仲間の使い分けを行う可能性が考えられる。

6 結論と考察

前章における分析結果を簡潔にまとめると、以下のとおりである。第1に基本的に日韓の中高生は共通して友人関係作りを回避しているわけではないが、友人との関係は一定の距離を保ちあまりお互いに深入りしようとしめない。ただし友人関係の選択化に関わる項目に関しては、日本は友人との話題、韓国は友人付き合いを使い分ける対象に違いがある上に、日韓共通して男子より女子に顕著に使い分け傾向が現れた。

第2に日韓中高生における友人関係の「質と量」の相違点に関しては、相談相手(質)と友人の数・友人と過ごす場所(量)の観点から友人関係の使い分け志向との関連性を検討した。分析結果によれば、日常生活で接触する頻度が高い友人の場合は、関係や話題の使い分けが求められる一方、生活時間に占める比重が低く、親しいコミットメントが要請される教師には話題の使い分けを必要としない傾向がみられた。そして友人の数では韓国・女子を除いて、友人の使い分けを重視する生徒ほど友人の数は多いものの、友人関係の使い分けと過ごす時間との間に関連性はみられなかった。

第3に友人関係の使い分け志向を肯定する規定要因に関しては、まず日韓両国とも on-line 上の友人関係がある場合は、日常接する友人とは異なる話題や接触方法でコミュニケーションをとる傾向にある。日本の中高生は、学校に適應しており、学習時間や携帯電話の操作時間が長いほど友人関係の使い分けをしやすい。韓国の中高生は、出身階層が高いほど、友人の使い分けをしやすい傾向が現れたものの、本人にとって身近な社会化関係要因や本人の属性(on-line 上の友人を除く)はいずれも直接的な影響はあまりみられなかった。

本稿の分析で注目すべき点は、まず日韓の中高生における使い分けられている友人関係の相違点である。先行研究を踏まえた仮説と本稿における知見を比較すると、日本の生徒は友人の数が多くなるほど友人関係の使い分けを重視する点と、友人と過ごす時間は一定の距離を保つ観点からあまり関係がないとする点は先行研究の知見と一致した(竹内 2009)。ただし韓国の生徒の場合は、友人の数が多くなるほど友人関係の使い分けを重視する傾向にあることは先行研究と一致したものの、日本よりも友人の数が多く、友人との接触時間が長い点に関しては先行研究と一致しなかった。友人関係の使い分け志向と友人と過ごす時間との間に有意な関連性は見られなかった背景としては、以下の観点が考えられる。韓国の中高生の場合は、日本に比べここ10数年間の間にインターネットが高度に普及している。その上、韓国では学院(学習塾)やお稽古のような学校外教育利用の低年齢化が進み、放課後の課外学習が長時間に及ぶ生徒が多いため(九鬼 2009)、親密なコミュニケーションは直接学校や

学院で会うよりも、on-line 上で取り交わす傾向にある（藤田・熊谷 2002）と考えられる。

次に注目すべき点は、友人関係の使い分け志向を規定する要因である。先行研究を踏まえた仮説と本稿における知見を比較すると、日本の場合は社会階層要因との関連性があまり見られなかった点と、学校生活の適応など社会化関係要因との関連性も先行研究の知見と一致した。韓国の場合は、社会階層要因との関連性に関しては先行研究の知見と一致したものの、教育達成要因（学習時間や教育アスピレーション等）と社会化関係要因との関連性が認められる点に関しては先行研究の知見と一致しなかった。

日本の中高生において、学校生活に関係する項目に正の効果が見られた。その背景には、日本では「学校のコンサマトリー化」を推進する個性化教育の潮流の中で、クラスを教師-生徒関係で心理的安定が得られる「居場所」として捉える動きが高まっており、学校での友人を起点に、部活や塾の通学などのように、学校外の場所でもつながりが維持することが影響すると見られる（大多和 2008）。韓国の中高生において、他の社会化のエージェントとの関連性があまりみられなかった背景には、以下の2つの要因が考えられる。第1に親や教師といった社会化のエージェントは、学力試験を主体とした選抜システムへの対応に動員される（有田 2006）。第2に主として学校では学業に特化し、学校外では遊びや流行を楽しむ「切り替え志向」が日本よりも強いことから（藤田・熊谷 2002）、他の社会化エージェントが生徒間の友人関係に関与する機会が日本よりも少ないことに起因すると考えられる。また、on-line 上の友人の有無と友人関係の使い分け志向との間で、日韓共通して正の効果が認められたのは、携帯電話やインターネットの普及により、on-line 上の関係をうまく使いこなして友人作りを働きかけることによるとと思われる（辻 1999; 浅野 1999; 馬居他 2005）。

このような調査結果から、友人関係の使い分け志向は日韓ともに現れたうえ、日本は友人との話題、韓国は友人付き合いを使い分ける対象に違いがあることがわかった。さらに使い分けを促す要因に関しては、日本は学業的要素や携帯電話の操作、韓国は社会階層要素というように、中高生の生活観や学習環境に違いが表れた。今後は、友人関係の使い分けを規定する要因に関して、日本と韓国で違いが表れる背景や、出身階層の規定力や社会化エージェントの影響が乏しい要因に関して探索的に分析を行うことを課題としたい。

【付記】 分析に用いたデータは、慶應義塾大学 YES 研究会（研究代表者：慶應義塾大学文学部教授（当時）渡辺秀樹）から許可を得て使用した。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）・課題番号：20330108 / 26285122）による研究成果の一部である。

注

- 1) 設問項目は「あなたは、どんなときに充実していると感じますか」（複数回答式）。2008年に行われた第8回調査によれば、日本は、「友人や仲間といるとき」が74.6%で最も高く、「スポーツ

や趣味に打ち込んでいるとき」(59.6%)、「家族といるとき」(41.5%)と身近な他者に関わる項目が続く。韓国は、「友人や仲間といるとき」が58.1%で最も高いことは共通するが、「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」(41.7%)、仕事に打ち込んでいるとき」(37.4%)のように、人間関係より行為に対する熱心さを挙げる若者が多い。詳細は右記参照。<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/2-7-1.html#1> (アクセス日:2016年9月20日)

- 2) フリッパー志向とは、携帯電話やインターネットの普及により、「対人関係に大きく拘束されたくない・オンオフの切り替え(フリッピング)を容易に保っておきたい」(辻 1999: 22)と考える志向のことである。なおフリッパー志向を持つ若者ほど、友人関係の希薄化論の想定する孤独感・虚無感とは逆に、友人に対する充実感が高まる傾向にあるとされる。
- 3) 浅野(1999)は東京都23区内と神戸市の15~29歳の若者を対象とした質問紙調査から、因子分析によって3つの因子を抽出した。その中の「状況志向」因子とは、次の特性を持つ因子のことである。①つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違うことが多い(自己の複数性)。②色々な人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない(関係の相互隔離)。③ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話すことが多い(その都度の没入)。浅野が状況志向に注目した理由は、状況志向は「社会的」「内向的」のいずれにも属さない、多重人格になじみやすいようなタイプであり、若者の実に3分の1程度が状況志向型の友だちづきあいであることに注目したからだとしている。

また浅野は、「状況志向」因子の強い人は自己の多元性を肯定し、場面によって異なる自己を使い分けていることが確認した(多元的自己)。浅野は、「状況志向」の人々がどの場面で「本当の自分」をさらけ出すのかを調べるために、人間関係を〈深い—浅い〉という軸の上に位置づけた。状況志向の人は、適切な距離を保って仲間との対立を回避し、その都度の役割をクールにそつなく演じることを重視する。一方で状況志向の人は、恋人や「純愛ドラマ」のように、親密さへの欲求を満足できない分、内面が触れ合うような「本当の自分」を見せられる「深い」人間関係を求めている。「本当の私」が分裂し多元化すれば、親密さにおける〈深い/浅い〉という「奥行き」自体が成立しにくくなるという。

- 4) 藤田・熊谷(2002)によれば、学業に特化する傾向が強く、統制の厳しい韓国の学校では、どの生徒たちも学校内ではそれなりの生活をする一方、学校外という場では学外の友人やファン・カルチャー、消費文化への接触により楽しみを充足しているとし、その傾向を「切り替え志向」と名付けた。「切り替え志向」が生まれた背景には、韓国の生徒は日本よりも熾烈な受験競争を勝ち抜くため、学業を中心とした生活を送るほかに、学校内と学校外では生徒にとって親しみの持ちやすいタイプが異なることが挙げられる。つまり、学校内では勉強や解法のテクニックが高い生徒や、知識の多い生徒が人気となるものの、学校外では流行やゲーム、インターネット等の知識が豊富な生徒が人気となることから、韓国の生徒は学校内と学校外で親しい友人をよく使い分ける傾向にあるとされている。
- 5) 「平準化」政策とは、熾烈な受験競争を抑止するため、一般高校における一切の競争入試の廃止と、抽選による各学校への入学者配定を柱とする制度であり、1974年に導入されたものである。「平準化」制度を取り入れられた地域は、一般高校への志願者は居住地によって自動的に決まる所属学群に対して志願する。各市や道が実施する連合考査に基づいて、合格者を学群内の公立・私立を問わず機械的に配定される。「平準化」制度は、2003年の時点で、ソウル特別市をはじめとする23の地域で実施されており、一般高校の56.3%、高校生の71.9%がその適用を受けている(石川 2005)。

- 6) 筆者は慶應義塾大学 YES 研究会の研究メンバーとして所属しており、本稿において使用した調査票の作成・企画・設計から、実査後のデータ集計・クリーニング処理に至るまで、調査過程の細部にわたって主要な役割を果たしている。なお本調査の実査自体は、日韓両国とも調査機関に委託して実施している。
- 7) 選択化得点は友人関係の「選択化」に関連する項目を相関分析した上で、相互の項目間に相関が認められたものを尺度構成した。選択化得点は表 1 に掲示されている「遊ぶ内容によって、一緒に遊ぶ友人を使い分けている (F4)」「色々な友人のつきあいがあり、それぞれ話の内容は違う (F5)」の 2 項目である。相関分析の結果、選択化得点に関しても $F4 \times F5$ は .182 ($p = .000$) と相互の関連性が認められたので、各項目を合計し尺度構成させることとした。なお選択化得点は、「そうである」(4 点) ～「まったくそうではない」(1 点) の 4 件法を用いている。
- 8) 「教育アスピレーション」は、進学・卒業を希望する学校段階を教育年数 (例：大学 = 16 年) に変換した上で投入した。なお親学歴についても、母親・父親それぞれの最終学歴を「教育アスピレーション」と同様に、教育年数に変換したうえで投入した。
- 9) 「授業適応」は「私は学校の授業の時間が面白い」など 6 項目、「学校適応」は「私は学校で定めた校則を守っている」など 6 項目を合計したもので、学校での授業・学習観や学校生活上のルールを尋ねた項目である。「教師関係」(11 項目)は「私は、学校の先生と気楽に話しをする」など教師とのコミュニケーションの程度、「父親関係」「母親関係」は、「勉強や成績について話をする」など、家族とのコミュニケーションの良好さを尋ねた項目である (父親・母親とも同じ設問項目、各 8 項目)。各尺度の信頼性を示すクロンバックの α は、「授業適応」は .773、「学校適応」は .811、「教師関係」は .896、「父親関係」は .841、「母親関係」は .786 であり、尺度としては一定の信頼性が填補されると考えられる。

参考文献

- 有田伸, 2002, 「教育アスピレーションとその規定構造」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社, 53-72.
- , 2006, 『韓国の教育と社会階層』東京大学出版会.
- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣, 41-57.
- , 2008, 「若者の友人関係とアイデンティティ」広田照幸編『若者文化をどう見るか』アドバンテージサーバー, 34-59.
- 浅野智彦編, 2006, 『検証・若者の変貌』勁草書房.
- 土井文博, 2003, 「友だち関係と規範意識」友枝敏雄・鈴木讓編『現代高校生の規範意識』九州大学出版会, 37-68.
- 土井孝義, 2008, 『友だち地獄』筑摩書房.
- 福重清, 2006, 「若者の友人関係はどうなっているのか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房, 115-146.
- 藤田武志・中村高康・有田伸・熊谷信司・金美蘭・渡辺達雄, 2001, 「学校・進路・学歴の日韓比較」『上越教育大学研究紀要』20(2): 343-371.
- 藤田武志・熊谷信司, 2002, 「学校生活と生徒文化」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社, 131-154.
- 石川裕之, 2005, 「韓国の才能教育における科学高校の受験名門校化」『比較教育学研究』31: 83-100.

- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の 90 年代」『教育社会学研究』70: 89-103.
- , 2004, 「電子メディアの普及と若者の人間関係, 社会関係」内閣府政策統括官編『日本の青年 (第 7 回世界青年意識調査報告書)』国立印刷局, 207-220.
- 金鉉哲, 2007, 「親・教師・友人との関係からみた韓国青少年の社会化: 国際比較調査より」『第 5 回慶應義塾大学 21COE-CCC 国際シンポジウム発表原稿集』慶應義塾大学 21COE-CCC, 347-363.
- 金美蘭, 1998, 「韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造」『教育社会学研究』62: 23-42.
- 工藤保則, 2001, 「高校生の相談ネットワーク」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房, 159-182.
- , 2010, 『高校生の社会化ネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 九鬼太郎, 2009, 『“超” 格差社会・韓国』扶桑社.
- 久世敏雄, 1994 『現代青年の心理と病理』福村出版.
- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用」『社会情報学研究』4: 111-122.
- 松井豊, 1990, 「友人関係の機能」菊池章夫・斉藤耕二編『ハンドブック社会化の心理学』川嶋書店.
- 内閣府統括研究官, 2004, 『第 7 回世界青年意識調査』内閣府.
- 中村高康・藤田武志・有田伸編, 2002, 『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社.
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』35: 111-122.
- 尾上恵子, 2007, 「女子学生の人間関係構築における諸要因について」『一宮女子短期大学紀要』46: 15-22.
- 大多和直樹, 2000, 「生徒文化——学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 185-213.
- , 2008, 「若者文化と学校空間」広田照幸編『若者文化をどう見るか』アドバンテージサーバー, 94-116.
- 清水昌人, 1997, 「外国人の生活空間行動: 東京大都市地域の就学生」『経済地理学年報』43(1): 59-71.
- 竹内慶至, 2009, 「友人関係は希薄化しているのか」友枝敏雄編『現代の高校生は何を考えているのか』世界思想社, 38-60.
- 辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版, 11-27.
- , 2004, 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ」『関西大学社会学部紀要』35(2): 147-159.
- 辻泉, 2003, 「携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み」『社会情報学研究』7: 97-111.
- , 2006, 「「自由市場化」する友人関係」岩田考・菊池哲生・羽瀨一代・苦米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル』恒星社厚生閣, 17-30.
- 馬居政幸・李熙照・夫伯夫・関根秀行・李在鴻, 2005, 「韓国における日本大衆文化の調査研究 (8)」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇)』55: 17-48.
- 山口洋, 2001, 「日韓中の若者における親子関係・友人関係の性差」『佛教大学総合研究所紀要別冊』, 61-77.

ENGLISH SUMMERY

**Analysis of School Life and Selective Friendship among Youth:
Comparative Research Based on Junior High School and High School Students
in Japan and South-Korea
OZAWA Masayuki**

This article is a study on the difference in youth communication between friends, based on a questionnaire administered in Japan and South Korea, two countries that share a similar educational standard and geographical proximity. The central projects of this article focus on the differences in communication among junior high school and high school students in both Japan and South Korea, based on their school life, and on the investigation of the regulating factor, which leads to an affirmation of selective friendship.

It was found that students in both Japan and South Korea generally showed a positive inclination about selective friendship (that is a relationship to make friends according to the occasion); however, they varied in terms of what they look for and value in the selection of a friend. Japanese students tend to value the topic of conversation with friends, while South Korean students tend to value the quality for their friendship. It was shown that students who use selective friendship have a greater number of friends. On the other hand, the regulating factor to affirm selective friendship in Japanese and South Korean students had a significant influence on the degree of an affirmative orientation for relationships with friends. And it turned out that the social stratified factor, which has been pointed out through Japan-South Korea comparison research, did not appear to have any significant influence on selective friendship, apart from the academic background of the father.

Key Words: selective friendship, socio-economic status, socializing agent, on-line network, comparative research between Japan and South-Korea